

曲  
戯

労働者階級の遅い目醒め

P・イワノフ

石川 玄 造 訳

舞台 今ではモスクワ外辺の新しい区画に幾万と見られるアパートの一つ。いわゆる近代的住居ではあるがより固くとざされた雰囲気がある。窓の下はまだはじまったばかりの冬の灰色に覆われ、広大な雪原に不似合な建築物と仕事場のパラックが散在しており、真すぐな道路が格子模様を作っている。そしてそのずっとむこうには神秘的で暗い森があって道路はそこで断ち切られている。

登場人物 ユーリ 機械組立工

ワリーヤ ユーリの妻 工員

サッシャ 彼らの友人 機械工

彼らは三人とも根からの労働者である。しかし彼ら自身の生活の捉え方は味気ない新聞や彼らに送られてくる「ユマニテ」の特別号を色彩する画一的なお定りのやり口とはかなり隔りが見受けられる。

△労働者―パトロン  
▽管理者

ユーリ なあサッシャ、想像できるかい、われわれのところじゃ労働者はみんなつんぼさじきだ、何がおこっているのかちっとも知らないままだ。長いあいだ労働者は理解していた、全ては労働者のものだってな。工場も家もトロリーバスも政府の別荘も……全て。労働者こそが主人であり主導者なんだと。われわれの理論家先生が言うように、みんなそう思っていた。

ただ御存知のとおりこの主導者ってやつも自分の言いたいことも言えなきや議論もせずにはいはいと言ってなくちゃならん。おい、仕事だ、黙ってやれ、だ。やつらの頭にかいかに低賃金で最大の生産をあげさせるかってことしかないんだ、あんたんと

こと同じようにな。

サッシャ ああ。特に今時分はな。生産性の向上ってやつが標語になっとるよ。

おまえ知っとるか、わしらのところがどうなっとるか。ま、みんなノルマを持つてるわな。もしそいつを越えて生産したら歩合でくれるわけだ。ところがだよ、ある時間帯でそいつをあんまり越えすぎたときに、やつらはノルマ引き上げにやってくるよ。ボーナスが一挙にはね上がるって寸法だ。だから若いのは気をつけなくちゃいかんのだな。

いいか、若いのが生産性の向上を指示されたとするよ、職制はわかったもんだ、ばかばかしいおべっかをつかいながらやり遂げさせるよ。そして彼はノルマを完璧にやりとげましたと書きつけとく。若いのはボーナスが入って単純に喜んじる。それから今度はおまえんとこにやっ来てこう言うさ「なあ君、きついんか。コンテル君を見てみるよ。君より五〇パーセントは余計にやってるぜ。サボってるんじゃないのか、ん？でなきや何だね？」ってな。次から次とこの調子だ。若いのは生産をあげていくよ、そしていつの日にかノルマをまるごと再切り上げだ。ハイ。

△説明なしに▽

ユーリ それにもうひとつ手があるよ。職制のやつがきて言うことに、さこうだ、「なあ君、今は一五〇ルーブルしか取っちゃいないが、わたしは一七〇まで出してもいいと思ってるんだが

ね、どうだね」それでこの賃金のうらにノルマの加重があるってことはおくびにも出さないんだよ。言われた方は承知しないわけがないさ、静かにいつもの調子で仕事をやっていくわ、それで月末に、さどうだ、一七〇どころか一三〇しかないじゃないか。ノルマを下まわっているから、さこうだ。前のように一五〇もraitたくても後のまつり、もはや今以上に働くしか手はないというわけだ。でもまあ、近ごろは若いのもわかってきてるよ、おことわりだって言ってるもんな。

ユーリや 時には給料を下げるのにそんな手続なんて抜かしてしまふよ。思い出さない、ユーリ、あの時、給料日のことだけど給料がルーブル足りないのに気づいたの。もう一度数えて見たわ。やっぱり同じ、他の子たちもみんな足りないのよ。だから会計係に説明を要求したの。そしたらさうよ。「あなたは第一原料の値上りを御存知ですね」「だから賃金から引いたんですか」「ことは国家の経済にかかわることなんですよ……全部説明しようとするね一時間はかかるんですが……つまりですね、お望みならお話ししますが、この値上りは国家予算のある欠損部分を刺戟するわけでして、これを補填するには本工場では一人あたりルーブルを前以って天引きするしかないってことなんですよ」わたしは女の子たちのところに戻っていったわ。「どうだった、説明してくれたか？」「ええ説明してくれましたとも。説明する理由なんか聞いてことをね、さうさで行きなさいですって」わたしたちは行きませんでしたよ。たかがルーブルくらいのためにぎゃあぎゃあ言いたくはなかったんですけれどね……とにかくきっちりしてるのよ、このシ

システム。いつかは国家予算のためだっていつてたけど、またちがう時は所得税が上ったからだって言ってた。それから近代化分の手当が下ったとも言ったりしたわ。心得たものよ。一ルーブルくらいなら大騒ぎにはならないってね。

わたしはこまめにおうかがいをたてました。すると組合じゃこうです 何にもしないんです ただ笑っているだけ

ワリーヤ 組合はどうかっていうとね、組合費をかき集めるのに窮々としてるんだわ。それだけよ。ほかのことはどんな決定もしないでうっちゃっておくんだから。あの人たちは権威を守るためにあるのよ。

それからいつだったかプロフォルク（一）に行つたときね、彼は言うのよ「あなたに会計係は何と言いました？」「それは国家予算のせいです、と」「では国家予算を読んでみて下さい」「もう読んでみましたわ。でもいつもながらわからないんです」「ふむ、じゃもう一度読んでみることですね」これだけよ、組合のできることですね！

ユーリ それはちよつと言ひすぎだよ、健康保険を扱ってるじゃないか。

ワリーヤ あら、いったい誰のお金で？

ユーリ 悪いの家の便宜をはかるとか：：ま、そんなことだけだな。労働者を当局から防衛するなんてことはやりっこないよ。反対により以上の圧力をかける道具になり下っている。組合と党と当局、こりゃ一匹のばけものについてる三つの頭さ。

サッシュャ うむ。労働者はここでは自分たちを防衛する手段は何ひとつ持っちゃおらんのだ。労働者は完全に全て班長の言うがままなものな。

ユーリ 前に働いていた工場では部分品を組み立てるんだけど規格が甘くてうまく簡単にいくのとなかなかうまくいかないやつがあるんだな。それにしてもある連中だけどんな仕事はかどってるじゃないか。職制のしわざさ。奴さんが分配したんだからな。お気に入りの奴らには規格どおりのうまくいくやつばかり配って虫の好かん奴には悪いやつばかりだ。つまり給料は職制の好き嫌いかかかってるってこつた。こんな調子だからいい仕事もらいたいばかりに黙って金渡してる奴さえいたよ。しかしいつまでもそうしちゃいられない。言いたいことを言わなくちゃならん。職制のやろうがあんまりきたねえことしやがると口にチャックのひとつもかませてやらなきゃな。

ワリーヤ 職制の他には何もないんだわ。いっとう最初に工場に出たときね、熟練工のそばにつかせられて。そう要領を覚えさせるために。

で、わたしが次に位置についてまねしてやってみる。はじめでだから一生懸命やったわ、ノルマ以上に。それで彼女の方はね、わたしがかわりにやっているんだもの疲れるわけないでしょう。仲間同志でベチャクチャやっているのよ。それであとになってからわたしがやったのを全部自分がやったことにしちゃって失敗したやつだけわたしの名前を貼りつけてるのよ。彼女にはボーナス、わたしにはたったの四〇ルーブルなんだから。他の人はみんな知ってるのよ、ほんとはどうだったか。でも班長

## △背叛▽

の目はふし穴で言うことをちっとも聞いてくれないんだから。

サッシャ 労働者を分断することになれば、やつらはいつでもOKだ。なんせそのためだったら何でもしやがる。わしらのところで能率給がどれだけのびるかということは何れでも何でもない。社会主義的競争、あのスタハノヴィッチ主義ってえのが何だか知っとるだろ、ありゃお互い労働者を監視訓練しあうひとつの方法なんだ。

もし何かうまくいかないことがありゃ不平を言う権利はあるってもんだ。だからよく言われるじゃないか「もちろんだとも手紙を書きたまえ、ライコムに行きたまえ」とね。どっこい何も得ることができない。ライコム(2)に行ってみるよ、入れてさえくれない。でもまだ個人の資格で言う権利は残っている。が、みんなでそろって不平をいうのは御法度だ。絶対ありつけないことだが、もしだよ、もし請願を組織してみたら、一巻の終りだぜ。

ユーリ そうとも。権力はバカじゃない。労働者にグループを作り、自分たちで組織するにまかせていたら何もかもおしまいだってことはよく御存知だ。労働者階級というのはいわば起爆剤を欠いた爆発物のようなものなんだから。ごくごく小さな集団行為が起っても連中にとってはとんでもないスキャンダルなんだ。けっそう変えてあわてふためく。連中には一大事なんだ。一度われわれのところでもそんな事件があったよ。ある日のこ

とスポーツニク(3)の告示があった。若いやつらはまあブツブツいいながらもなんとか賛成するわけなんだ。ふつうはね。建物の掃除とかちよっとした配置がえ、花をかざってみたり、まあそんな程度のことだからな。ところがその時は掃除じゃなかった。労働報酬なしにいつもと同じように働け、と来たもんだ。若いやつらもこれにはいささか頭にきて御免だと言いだしたんだ。組合大会にゃみんなやって来て反対投票したよ。

連中、予期してなかったもんだからあわてちゃってね、大さわぎだったよ。工場で反乱だ、やつらの話しを聞いたときゃよかったってな。

それからすぐに班長クラスに動員がかかって若いのひとりひとりに会いにやらされた。納得させにね、あらゆる弾圧をちらつかせながら。KGBのやつらも調査にのり出した。主謀者が誰々だったか泥をはかせに来たんだ。

その後新たに大会が組織されて、今度は当局側が多数をとった。しかしそれでも反対投票したやつはいるし、とうとうスポーツニクに出てこないものも出てきた。当局は一応様子をみていて少し静かになるのを待ってたんだ。その間注意人物を色分けしていつに十数人ごっそりやられたよ。

サッシャ 若いのもだんだんわかってくるのさ。どうやって自分たちを分断しにくるかってことを。時には執業に逆ってるよ、彼ら。わしが働いた工場では三年間のあいだ当局が基本給の上にどんな具合に特別給を上のせしたものが腐心しておったんだ。まず四〇カペイカ渡すところを三八に削ってそれから上前はねた分を集めて分配しなおそうってわけだ。配当担

当は班長だ。ノートにゃこうだ「ペトロフ、いつもより二分遅刻五ルーブル。パブロフ、こいつは不平がちと多すぎる、こんな奴は0だ。シドロフ、こいつはいい子だ、二〇ルーブル」とまあ、こんなあんばいだ。

若いのがこれを喜ぶわけがなかるうさ。もうたくさんだってこった。連中このボーナスをもらうとみんなでプールして共通にわけた。これが一部始終さ。彼らお白洲に「首を命じられたよ、全真な。「なんだって？ ええ？ そりゃアオーキ っでもんだ。おまえたちはカードルの権威をおちょくってるのか。そんなことをする権利なんかないんだ」とこうだ。しかし、これがあってからこの手のボーナスは廃止になったよ。

しかし上のほうではこりゃ不愉快きわまりないんで実に悪いことかもしれん。KGBが介入してきてレポートを作成してしまつた。おかげで連中、上級の役所に出頭を命ぜられて口ぎたなく罵られた。「おまえらんとこじゃ何か、サボリーマンに規則を勝手に作らせているのか」とな。もし工場で重大な運動が起きたりしたら、おえら方も最高管理職の道はもうあかん。こりゃ自動的にそうなつとる。当事者は階級を下げられ、いいだけ足さまにされてダゲスタンかどっかにとばされちまうんだ。

ストをやるまでにゃこんなことが何回もなきゃならんのだろ  
うか

△ストは絶対にだめ▽

ユーリ おれはストは見たことがないな、かなり珍しいんじゃない

いかね。時々話してるのがあるけどな。

ワリーヤ 一九七一年の一〇月ドンバスであつたわ。わたしの友だちが親元に帰つたときちょうどストになつたんですって。彼女言つてたわ。まず、鉈内の安全性に問題があつたのよね。通気が悪くて不満だつたそうよ。それに休憩時間の延長も課題としてあつたんです。四五分のところを一時間にしてほしいということなんです。もちろん賃金問題をね。そこで彼ら管理局に賃上げかきまなくば就労時間の短縮を、と要求を出したんです。

管理局ではひとつひとつ言い分を聞いていたけど結局拒否。羽れわれは第一、金がない。しかもこういう問題はわれわれの手には負えない！」って。

ちょうどそんなとき購売所がつぶれちゃつたのよ。もともと供給はよくなかつたんだけど折も折、肉があたりで全然みつからない時だつたもんだから：：ドンバスはその夏までは結構スムースに供給されていたんです。それがまたたく間に窮乏。

△軍隊の出勤▽

ワリーヤ 鉈夫たちはそれでスト突入を決議したんです。彼ら、自然発生的に自ら組織して、そう、もちろん組合の外側でよ。組合はストを許可することはできないんですから。そしてしばらくすると戒厳令が敷かれ、いかなる集会も禁止され、軍隊が待機。何回か小ぜり合いがあつてとうとう軍隊が出動したんです。軍は空砲を撃つたというんですけどとにかく騒然となつて、わたしくわしくは知らないんだけど死人が出たとか出な

ったとか。そして逮捕に次ぐ逮捕。それだけやっても部分的な満足すら得られなかったんですよ、彼ら。

サッシャ わしはこんなこと聞いとるぞ。もう三、四年になるがね、レニングラドで数回ストが打たれた。価格の騰貴に反対して。労働者が工場から出て党委員会の上の市場に行ったら値段がそこでつり上げられようとしてたということだ。本当かどうかわからんよ。

ユーリ でもレニングラドやドンバスではありうるよ。本物の労働者階級があるんだから。彼らには伝統がある。おれはモスクワの労働者はプチブル根性のはびこっているというか腐っていると。消費物資がはびこっていて……

#### △年寄り酒を飲む▽

ユーリ それに権力によってひっかきまわされてるっていう情況もある。作意的な窮乏があるのは確かだ。たとえば塩。ちょっとばかり前、塩がどこにも売ってなかっただろう。長くは続かなかったがね。でそれがまた出まわりはじめたときはずらっと行列ですよ。各々十袋も買い込んで……列を作り、他のことはどうでもなる。こりゃあんた、プチブル根性を刺戟する方法じゃないかね。個人的に何でも解決しまおうってことなんだから。よくはわからないけど……

それからたとえば庭園を作るための猫のひたいほどの土地を分譲している企業があるわな。もし一生懸命働いていい子でいたら、やがて小さな庭園を持てるだろう。毎日曜ごとモスクワ

から七、八〇キロはなれたところまで出かけて行ってせつせつするはしをふるうわけだ。どっこいそれがわれわれから考えることを奪う方法なんですよ。

サッシャ うむ。それは人々がよっぽど忘れたがっているということでもあるんじゃないか。おそろしいことだよ。酒におぼれるとか。ソヴェト人民は実によく飲む。しかし、ユーリ、人々がもしほんとうに幸福だったらこうも毎度のように飲んだりするかね。飲んで美しき人生をすごせるからだって思うかい。

ユーリ ああ。御老体は特にそうだなあ。若いのはそうじゃなくて週末仕事かひけると電車に乗っていなかに行くようだ。月曜の朝帰りだな。猟とか釣り、スキー。われわれのところはみんなこんな調子だ。

#### △党のプラン▽

サッシャ この夏仲間と遊びなところに行こうってことになってね。行ったんだよ、森なんだけどね。ところがずいぶんひらけちゃってるじゃないか。二、三年前と大した違いだ。これじゃおかしくってね。

若いのが悪いの家なんかにはきつけられるわけじゃないよ。こりゃ官制旅行だからな。若いのはとにかくシステムから抜け出したいと思ってるんだ。せいぜい二週間くらいは糞野郎どもいない静かなところを見つけてあのタコペヤからできるだけ離れたところに行くこと、ささやかに息づくこと、これだよ。

わたししゃふつと思うのさ。なまけ心で言うんじゃないが、わたしらの仕事はヨーロッパの工場よりはいくらかでもつらくはないようにならんもんかと。

ユーリ あんたんとこはまだいいよ。労働者はまだ金さえあればなんとか楽しめるんだから。われわれのところじゃ金が何の役にもたたんことがしばしばだ。デパートに行ってみりゃ何も売ってない。レストランに行けば席がない。手に入れられるのはウォトカくらいなものじゃないか。

それにわれわれのところじゃ労働者にはどんな権利もない。くそくらえだ。みんな大昔の奴隷のように消極的な抵抗を試みているよ。ただ奴隷とちがうのは工場をかわることができるといふものだ。今、わがソヴェト国家は職人がかなり不足している。つまり他に仕事をみつけないといけない。ついでに、ついでにということだな。あんたがもう少し強く背中をつっついてくれりゃおれはまちがいなく今の仕事をやめちまうだろう。われわれがいくらかでもあてにできるのは供給法と労働の需要じゃないか。

サッシャ そう。しかし他のところでも事情は同じだ。供給も需要も十分じゃない。それにわしの印象では若いものだんだんわかってきとるからな。ただ今んところは何もできないということにすぎない。

ワリーヤ そうよ。多くは語らなくても若い人たちはよくわかってるわ。

ところが一方、入党を受入れる人たちは減ってきてるのよね。

今じゃ入って下さいってお願いしなきゃなんないそうよ。だから労働者の間じゃちょっとした徵募パニックね。党は党なりにプランはあるのよ、労働者はこれこれの比率で、インテリはこれこれの比率でって。でも労働者の方はなり手がなくて定員に満たないの。党はまさに労働者の党でなければならぬのに。パルトルク(6)が労働者のところに来て入党を勧めるの。

たしかにそのうち何人かは最終的に入党を決意するわ。でも多くはない。決心はしたものの本心から入党したいなんて思っちゃいないんですからね。

だけど労働者黨員が定員に満たないからといって他の分野から横流しするわけにはいかないのね。インテリは逆に入党がとてむつかしいんですから。入党するのに列を作るんだって。もし自由に入党させていたら党はインテリばかりになっちゃうわ。

インテリが反党インテリのことをどう考えてるか尋ねるためだ。めだつたらそうなってもいいんじゃない。

ユーリ インテリとわれわれとじゃ事情がちがう。やつらは特権階級だよ。そうさ、ふつうやつらはわれわれよりもうけてるよ、われわれより働きもせんぞ。おれは理学博士をひとりに知ってるが彼は自分の研究室には週一度くらいしか出てきよらん。他の時間は長いすに寝そべってるよ、考えてるんだとき。それで月に四〇〇ルーブルも取ってるんだからな。

その上他にいろんな特典があるんだ。パカンスに特製の憩いの

家。コネがあるんだな。仲間うちでうまいこと調整しあってるんだ。こういうことが、インテリはともかくエリートだ。

じゃエリートってえのは何か、われわれ労働者が奴さんたちのために働いてるってこっちゃないか。

おまえは反対を言うかもしれない。彼らは表現の自由を要求して闘っている、外国に自由に旅行できる権利を求めている：：たしかにそうだ。だがやつらは搾取の廃止は言わん。それにっいては言ったためしがない。なぜか。それはやつらが搾取で食ってるからさ。やつらは自由でありたいと思うだろ、誰かが彼らのために働いてくれるという条件のもとでな。やつらはいっまでもエリートだと思ってるのさ。その上、その解放のためなら資本主義に逆行するのも辞せずと考えてさえているんだ。

### △全て召使い▽

ワリーヤ あの人たちは自分たちを特別な人間だと思ってるのよ。わたしたちを軽蔑してるわ。あなた知ってる？ あの人たちが労働者を何と呼んでいるか。召使いて。彼らにとってはどんな労働者も召使いなよ。「おや蛇口がこわれちまった、召使いを呼ばなくっちゃ」「なあ、食卓を用意してくれるような召使いはないかね」あの人たちは労働者を酔っ払いかとんま以外のものだとは思っていないのね。

サッシャ 彼らはよく労働者階級について語るよ、その実何もわかつちない。彼らは労働者階級が相変らず四十年前の姿をしていると信じている。ずいぶん変わるといふのにな。今じ

ゃ高い質の労働者の分野もいろいろある。たとえば研究労働者。情況に興味を示す労働者だって大ぜいいる。彼らだって何かを読めば行間まで読みとるし、外国のラジオだってよく聞いている。

ユーリ おれは労働者のほうがそんなじょそこらのインテリより外国のラジオに対してより適確な批判精神を持っているとあえて言いたいね。労働者は流れてくる話をそのままのみにしたりしない。ラジオが西側の労働者はかくかくしかじかだと言うにしてもそしてそれが正しいとしてもひとりでにそうなったのだとは考えていない。なぜならむこうでも班長がいて管理者がいるわけだから何かを望めば闘わなければならないことは重々承知しているからな。インテリにゃここがわからない。なんせプロパガンダでそうなったんだと思ってるんだからな。

ワリーヤ それは西側でも同じ。労働者にとってむこうも樂園じゃないのよ。今はチリのなりゆきを見るしかないわ。

サッシャ 確かにな。こういう問題にはいくつものちがった態度がありうるからな。仮にあえて言わないにしても多くのインテリは考えてる。チリ人民の底辺ではクーデタを受入れる理由があったんだとね。なぜならクーデターなかりせば共産主義者たちは権力を握れたんだし、いずれはわしらのところと同じような途を歩むにちがいはなかったんだから。

労働者はここではひとつ認識しとくべきだ、チリでは人民が労働者のやり口をぶちこわしたってことをな。それともし今、労働者がまわがっているとしても、みんなそろってそう言うにしても人民は本能的に労働者の側につくということ。

## △大衆のために▽

ユーリ 一般的に言って、おれの印象だけど、インテリは民主主義や自由について考えながらそれを語っているだろう。彼らは本を書き、作品を自由に発表できる権利を望み、自分の意見を自由に述べたいと欲している、確かにな。

しかし、この民主主義や自由は彼ら自身のためのものじゃないのかね。はっきりとは言えないがやつらがわれわれ労働者もその恩恵に与ることを望んでいるとは思えないね。なぜといえばやつらはほんとうはわれわれのことをおそれているんだから。やつらにとってはわれわれは無教養の大衆であり、原始人であるわけだ。やつらときたらもし労働者が街におりてきて最初にすることは略奪であり殺人であり、とまあこうだ。殆んどはそう考へてるよ、真剣にね。

どんな場合でも彼らはわれわれが服従しつづけなければならぬと思っている。そのくせいつでもどこでも権力の言うがままだ。「重要な問題は教育を受けた人々のあいだで解決されるべきだ」われわれは機械のうしろに働いてさえいれればいいんだと。ひどいインテリ野郎もいてな、労働者はよく働かん、ハンデをつけるべきじゃないか、なんてな。西側の方法を導入すればすぐこの調子だ。

さて、こういうことだ、こんな民主化、自由化なんてえのはわれわれには関係がないことなんだ。もしインテリが権力をとってわれわれはそこでは何も得ることはないだろうよ。

そりゃ何もできないってことじゃない。そうじゃなくって自由化はわれわれにしてみりゃまだまだ不十分だってことさ。もっともっと徹底しなきゃならんのだ。そのためにインテリに何でもまかしておいちゃいかん。自分自身でやらなくちゃならないんだ。自分たちの問題は自分たちで解決していくしかないんだ。

### 注

- (1) プロフォルク 企業の組合の責任者
- (2) ライコム 党地方委員会
- (3) スポトニク 半どん。無給の労働奉仕
- (6) パルトルク 企業内党组织の責任者

ここに三人のソ連の労働者が紹介されている。八千万を超え労働者の中の三人である。そしてここでは彼らの切実な問題がつつみかくさず明らかにされている。

現実の国家の中ではこの三人の対話の知的水準は標準以上に高く、まだまだ少数派の流れの中にしか見出だせないことは殆んど疑う余地はない。

しかしながら少数派であることはなにも例外であるということとを意味するわけではない。せんじつめていえばある彼らによる評価の成熟は、精神の発酵が人々の考へているよりはるかに進んでいること、少なくともソ連労働者のある分野ではそうであると言える。なぜなら個人的な反応部分を極小にきりつめる

ことなしにそれは彼らの表わす思想が集合的反應を結実させ、労働者間の自然発生的見解の討論と交換を結実させていて、決して閉じられたつぼの中の個人的な知的遊戯的産物とはなっていないからである。

西側の人びとの中にはこれらの意見はあまりにも基本的であり、また非政治的であると思う者もいるかもしれない。しかし、古いロシアの労働者階級が革命と内戦とともに消え去り、それにかわって殆んど全土にわたって農民を出身とする、あるいはそれに類似した新しい労働者階級が育成されたことを想起すれば首肯できよう。彼らは古い闘いの経験のある労働者階級から完全に庶断され、恐怖の企業地獄に隷属を余儀なくされ、歴史に先例をみない韜晦に隷従させられていたのである。今日でも依然として彼ら自身の組織、彼ら自身の手になる新聞を有する可能性はきわめて小さく、ソ連プロレタリアートは實際的に言ってゼロから全てやりなおさなくてはならないことを自ら知るのである。

(P・イワノフ)

註釈 このソ連労働者の声は昨年暮ハボリチク・エブドV誌に掲載されたものを訳出したものである。P・イワノフ氏は現在フランスに在住しているが、これを執筆するにあたっては純粋にソ連国内の具体的な資料によっている。

X X X

(七三頁より) の歴史をその起源にまでさかのぼって深く検討する必要がある。

歴史の中でその時代に虚勢であった者の記録は多く残りがちであるが、ことに共産主義の歴史の中では長いスターリン主義の支配の中で、自然にかあるいは人為的に消されて行った資料も少なくないと思われる。消されて行った資料の中に意外と真実を語るものが多いことは諸質の知るところである。我々はできるだけこのような資料をさがし出し邦訳してゆきたいと思う。

性とアナキズム

小川正夫評論集

六〇〇円(送料共)

名古屋市昭和区小坂町二の一六

小川正夫遺稿集刊行会

山鹿泰治・人とその生涯

エスペラントとアナキズム

向井 孝著 六〇〇円(送料共)

東京都板橋区赤塚二の三五の九

白樺ハウス一〇号 青蛾房

(いずれも本誌編集部でも取り扱っています)